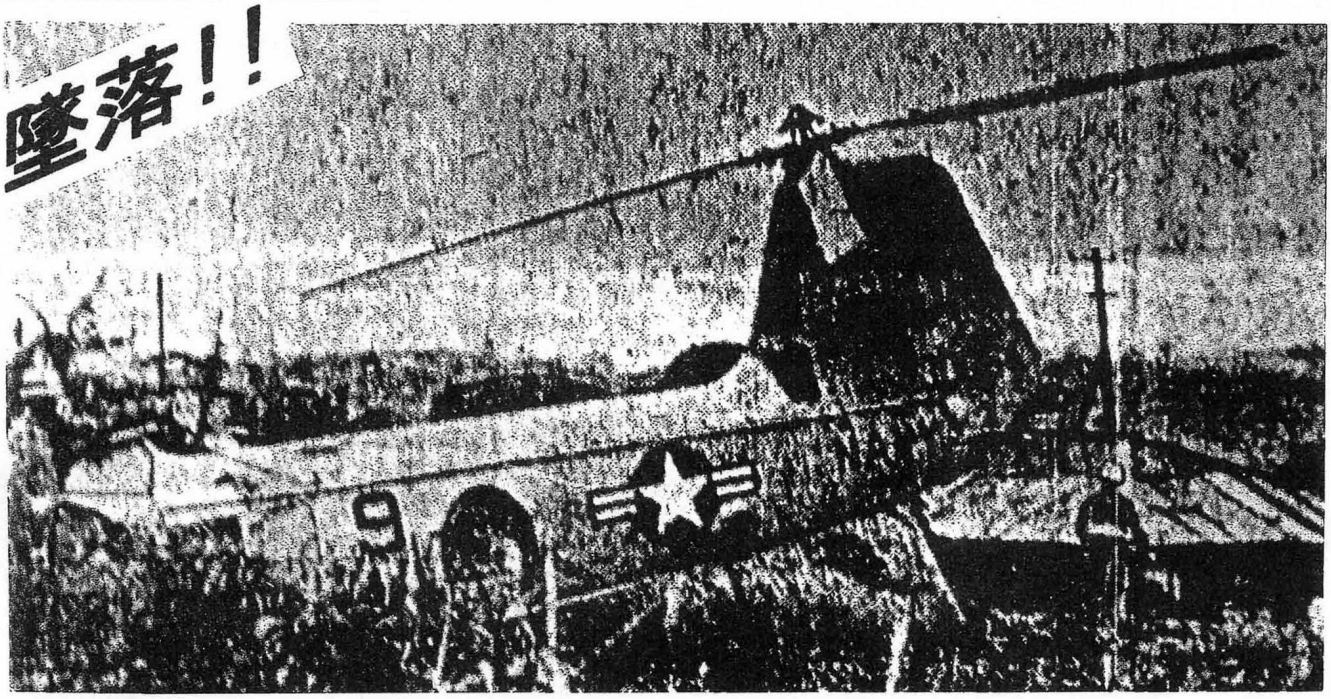
市史だより
Gačimajaa がちまや

第2号・2004年8月31日(火)発行
年4回 (5・8・11・2月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先
＊ ＊ ＊
☎ (098)893-4431
Fax (098)893-4434
Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp



1960(昭和35)年1月10日、午後4時45分、米海軍ヘリUP130064が宜野湾村(当時)宜野湾の農家近くに墜落した(写真)。墜落地点は、民家の集落からわずか10メートル足らずであった。目撃者によると、このヘリは普天間飛行場へと向かう途中で墜落したという。石川市宮森小学校へのジェット戦闘機墜落の記憶も生々しい。翌日の地元二紙は住民の不安と恐怖を次のように伝えている。

「突然ものすごい爆音に家中がゆれ仏壇の位牌も倒れました…もし屋根の上にでも落ちたらと考えると不安でたまりません」(「沖縄タイムス」1960年1月11日 朝刊)

「墜落してから逃げ出そうとしたが、足がすくんで動けなかった」(「琉球新報」同)

1960年に発せられたこれらの言葉が実にリアルに響く。それはいうまでもなく、2004年8月13日の米軍ヘリ墜落事故をただちに連想させるものだ。1960年から40余年を経た現在も、私たちを取り巻く日常は当時と何も変わっていないのではないか。そんなことに今さらながら気づかされる。

『エイサー』ってなぁ～に？

旧盆前になると、エイサーの太鼓の音、三味線の音、掛け声が風に乗って、私達の耳に届きます。エイサーは、まさに夏の風物詩の一つです。色鮮やかなハッピや浴衣に見を包んだ踊り手の青年男女が躍動的に踊る様子は、エネルギッシュで活気に満ち、私達をワクワクさせます。

エイサーは本来、旧盆に行われる盆踊りのことで、祖先を供養するためにエイサーは踊られていたのです。エイサーという名称は、盆踊りをする踊り手がはやす「エイサー　エイサー　サッサ」という拍子（フェーシ）から来ているともいわれています。

○戦前の宜野湾のエイサー

写真①　各家々で踊るエイサー（伊佐青年会　1967年）

戦前の宜野湾では、安仁屋・我如古・宜野湾・伊佐・愛知・神山などの字で、旧盆にエイサーが行われていました。字のエイサーは、服装・踊り方・曲目ともに共通していました。各字には、三味線弾き２～３名と太鼓打ちがおり、それらを囲んで青年男女が行列をなして、各戸で踊り歩くというものでした。男性は、芭蕉衣（バサー）や紺地を着て帯をしめ、頭には白の鉢巻きを前結びにしました。女性も紺がすりに帯を前結びにし、男女とも裸足でした。そして歌われるエイサー歌（①曲名不明、②仲順流（チュンジュンナガリ）り、③久高（クダカ）、④花ヌ風車（ハナ　カジマヤー）、⑤テンヨー、⑥越来（グイク）ヨー）によって、扇（日の丸）や四つ竹を使用して、踊っていました。また、旧盆に踊るといっても、旧盆の３日間に踊る字（伊佐）、２日間だけの字（愛知、安仁屋）、１日だけの字（神山）といったように、踊る日程はそれぞれ異なっていました。

例えば、安仁屋は戦前、エイサーの盛んな地域で、エイサーは16日のウークイ（お送り）が済む午後８時頃から始まりました。踊り手は、男女とも小学校を卒業した15、16歳～20歳位までの青年たちでした。当時、60戸あった全家庭すべてを巡るために、翌日の16日までかかっていたそうです。我如古でも同様に16日の夜から翌日にかけて全家庭を巡り、一団がやってくると各家庭では、お礼として酒２合とあんこ餅を渡していました。

○現在の宜野湾のエイサー

宜野湾では現在、ほとんどの区（野嵩一区・三区、普天間一区・三区、新城、喜友名、伊佐、大山、宇地泊、大謝名、嘉数、真栄原、我如古、長田、宜野湾、19区、中原）で、エイサーが行われています。（戦前にエイサーがなかった区では、他地域のエイサーを教わって、始めているところもある。）旧盆には、区内の辻々を中心に踊り歩く姿も見られ、エイサーの曲目も流行の民謡を取り入れたり、〆太鼓（シメダイコ）や半胴鼓（バーランクー）の使用も目立つようになりました。９月１１・１２日は、宜野湾市青年エイサー大会がありますので、この機会に是非、足を運んでみてはいかがでしょうか。

写真② 区内をまわるエイサー（伊佐青年会1980年代）

＊宜野湾市青年エイサー祭り

と　き：２００４年９月１１日（土）・１２日（日）　両日午後３時～

ところ：宜野湾海浜公園（運動公園）

主　催：宜野湾市青年連合会

行政資料にみる戦後の宜野湾（2）

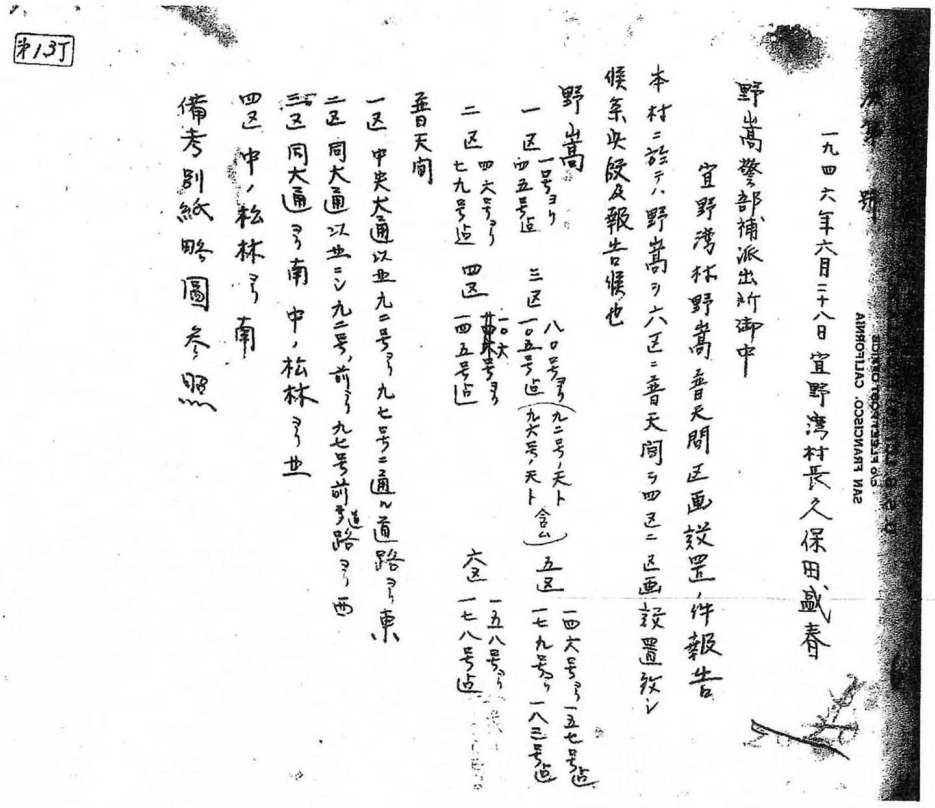
～野嵩収容所から行政区設置まで～

野嵩収容所は、1945（昭和20）年4月、米軍上陸後のわずか2～3日後に設置されました。野嵩収容所の周囲には有刺鉄線が張り巡らされていたものの、野嵩地区はほとんど戦災を被っていませんでした。焼け野原と化した他の地域とは違って、野嵩集落には緑が生い茂り、屋敷もほぼ完全に近い形で残っていました。カー（井泉）も健在で、湧き水がこんこんと流れていました。当時の野嵩を「別天地」と語る人もいます。

一方で、戦場で捕虜・難民となった人びとが続々と野嵩収容所へと収容されました。そのため、収容所は人で溢れ返り、かつての集落もその様相を変えます。屋敷は難民の収容施設となり、一つの屋敷には50人ほどの人びとが雑居し、人びとは屋敷の母屋はもちろんのこと、アシャギ（離れ屋）や家畜舎にも寝泊りしていました。収容所内には、役場、MPテント・配給所・病院などが設置されました。カーの湧き水はすぐに枯渇し、人びとは水不足に苦労しました。また、敗残兵と化した日本兵が夜襲に来るなど、収容所での生活は危険を伴うものでした。

対日戦が継続していたため、野嵩を含め米軍基地周辺の収容所にいる人びとは一時的に北部へと移動させられました。しかし、島尻地方での戦闘が激しくなるにつれ、再び多くの難民が収容されるようになります。

1945年10月以降は、各地に分散していた旧宜野湾村民が野嵩へと「帰村」するようになり、野嵩収容所には最大で1万人以上もの人びとが収容されていました。



第13丁

一九四六年六月二十八日　宜野湾村長　久保田盛春

野嵩警部補派出所御中

宜野湾村野嵩音天間区画設置ノ件報告

本村ニ於テハ野嵩ヲ六区ニ音天間ヲ四区ニ区画設置致シ候条決裁及報告候也

野嵩

一区　一号ヨリ四五号迄　三区　八〇号ヲ（九二号ノ天ト九六号ノ天ト含ム）一五五号迄　五区　一四六号ヲ一五七号迄

二区　四六号ヲ七九号迄　四区　一〇六号ヲ一四五号迄　六区　一五八号ヲ一七八号迄

音天間

一区　中央大通以西九二号ヲ九七号ニ通ズ道路ヲ東

二区　同大通以西ニシテ九二号前ヲ九七号前ヲ道路ヲ西

三区　同大通ヲ南　中ノ松林ヲ西

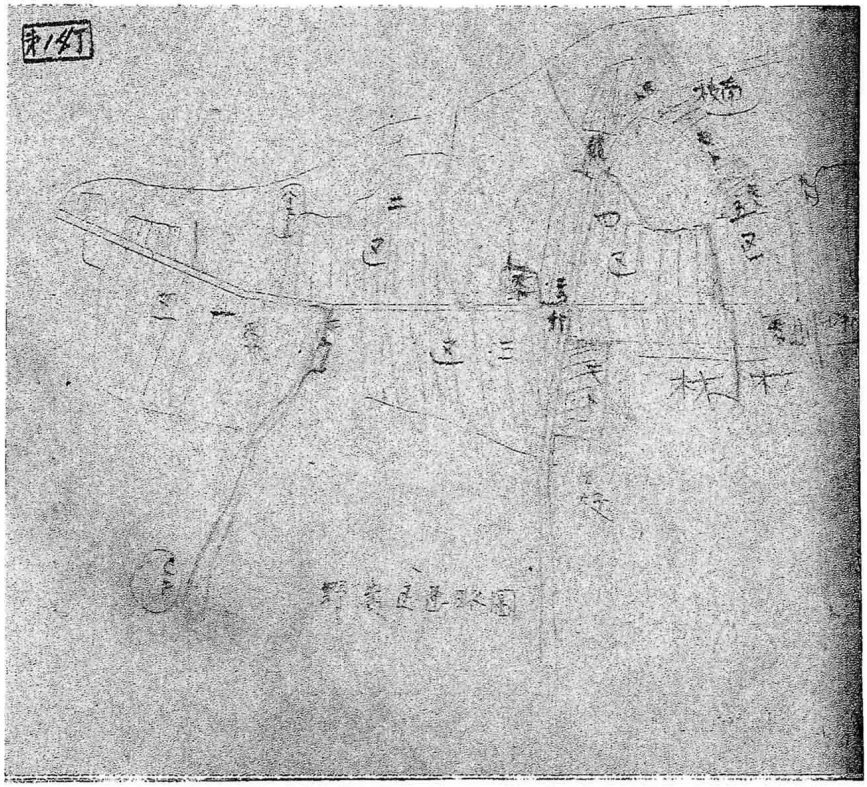
四区　中ノ松林ヲ南

備考　別紙略図参照

資料1 →
「宜野湾村野嵩音天間区画設置ノ件報告」

収容所の人びとは軍作業や芋掘りに従事し、生活諸物資は米軍から無償で配給されていました。しかし、食糧事情はすぐに悪化し、人びとはモビール油を使って、てんぷらなどを食べていました。

1946 年 4 月になると、宜野湾村政が復活します。同年 6 月には、宜野湾村に計 10 区からなる行政区が設置されました。「宜野湾村野嵩普天間区画設置ノ件報告」(資料 1)によると、行政区は野嵩に 1～6 区、普天間に 1～4 区が設置されたことがわかります。また、それぞれの行政区には行政区長が選出され、「行政区長会」なる会合も開かれるようになりました。では、別紙資料の「野嵩区画略圖」(資料 2)を見てみましょう。この見取り図を見ると、野嵩 1～6 区からなる行政区は野嵩収容所の地理的な範囲を示しているものと思われます。しかし、普天間行政区の範囲が示すものについてはまだよく分かりません。また、資料 1 に示される各行政区「～号」が、収容所時代のハウス番号を示しているのかどうか現時点では不明です。

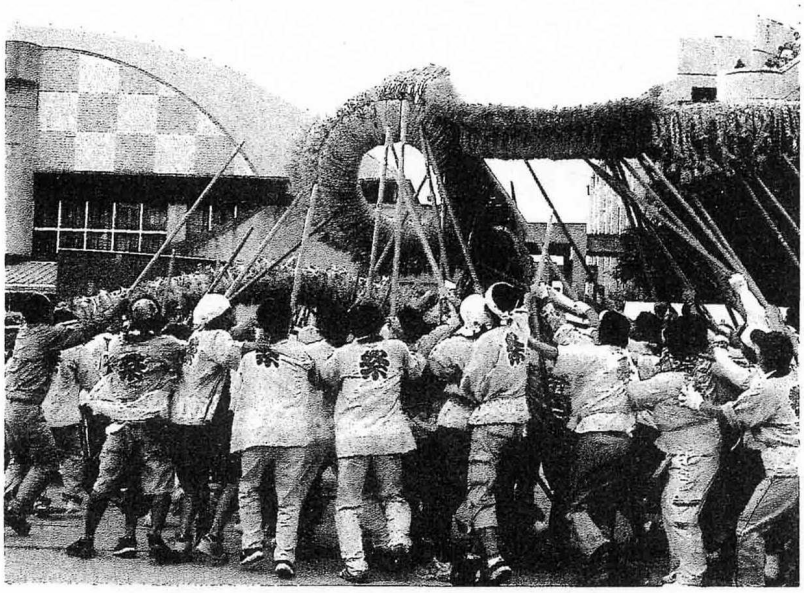


資料2 「野嵩区画略圖」このような見取図は非常に貴重なものです

野嵩 1～6 区、普天間 1～4 区は、人びとの「帰村」が許可されていなかった時期の行政区であることから、村民の人口移動と戦後初期の宜野湾村政を考えるうえで大変興味深いものです。しかし、人びとが旧居住地へと「帰村」していくにつれて、これらの行政区は徐々に機能を失い、その暫定的な役割を終えます.

♪ やんの六月ね なひんまかさ ♪

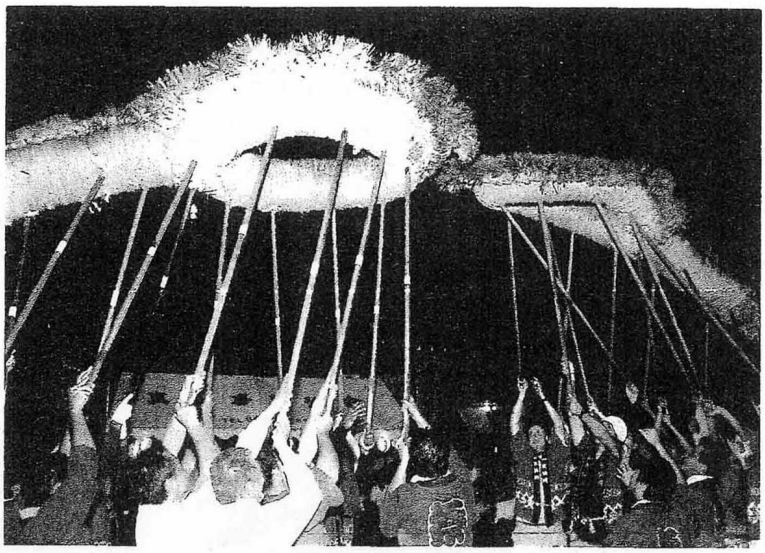
朝・夕の風も少しずつ暑さから解放されて、秋の到来も感じられるようになってきました。夏のにぎやかな祭りのシーズンも過ぎ、ちょっぴり静かな季節を迎えようとしていますね。みなさんは、この夏、どんな祭りや行事に参加しましたか？



大山　大綱引き　アギエー　勝敗のついた瞬間（2004.8.1）

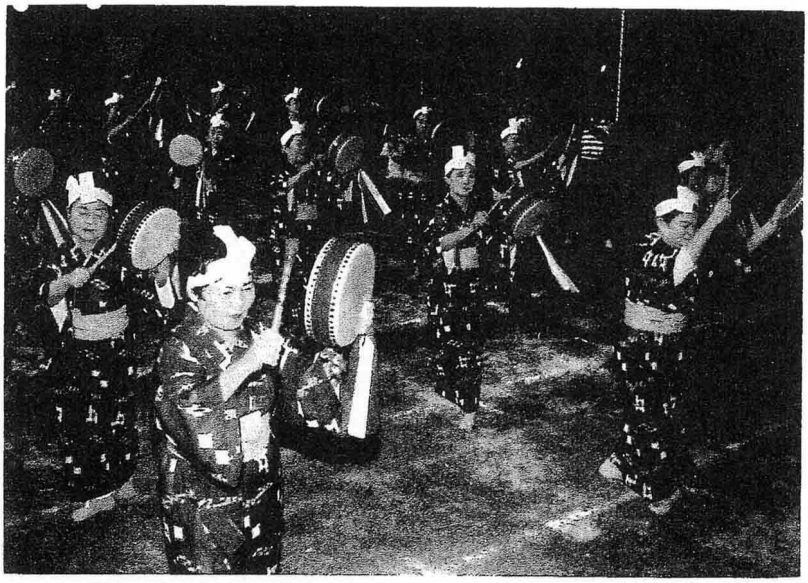
前号の「がちまやぁ」でも、宜野湾市内の綱引き行事について、あらかじめ少し紹介しましたが、8月の1日には大山、真志喜の綱引き、8月8日には野嵩のちなひちもういが行われました。綱引きは、あいにく雨も降る天候の中でしたが、大山、真志喜共に、とても盛り上がりのある勝負が繰り広げられました。

特に、雄・雌両方の綱をたくさんの棒で高く持ち上げてぶつけ合い、倒したほうが勝ちとなるアギエーの勝負は、その迫力に、参加している人びとも、勝負を観戦している側の人びとも、一つの大きな興奮に包まれました。ちなひちもういの日は、天候にも恵まれ、子どもから年輩の方々まで多くの人が、優美な踊りと歌を楽しみました。



真志喜　大綱引き　アギエー勝負の始まり（2004.8.1）

野嵩のちなひちもういは、かつて綱引き行事の際、婦人たちによって踊られていた踊りを再現した祭りです。太鼓を打ち鳴らし、歌いながら、そろった動きで踊られる踊りは、とても見事です。ほかの字では、このように同じ動きで踊るような例が少なく、その中でも特に野嵩のちなひちもういは、市内外で綱引きが盛んだった戦前から、美しいと評判でした。他の字や、市外からも見物客が訪れたといいます。戦前、踊り手は主に十代の未婚の女性たちであったため、若い男性たちも大勢集まってきたとか？！実際、若い男性が前のほうに詰め掛けると、踊りのさまたげにならないように、おばぁさんたちがテービー（たいまつ）で追い払っていたそうです。こんな賑わいの後、綱引きが行われていたのですから、かつての綱引き行事が、見どころ満載の一大イベントだったことをうかがい知ることができます。



野嵩ちなひちもうい　太鼓の音もかろやかに♪（2004.8.8）

「やんの六月ね　なひんまかさ」とは、野嵩ちなひちもういで歌われる歌詞の一節で、「来年の六月にも、必ず勝ってみせましょう」という意味です。来年は、どんな興奮の渦が生まれるのでしょう。いつかまた、戦前のように、こんな興奮の渦が宜野湾市のあちこちで湧き起こることを想い描いていたいと思います。

資料を探しています！

宜野湾市史では資料を探しています。ご自宅に眠る昔の写真や書簡などはございませんか？それらは今や貴重な資料となっています。もしございましたら、下記連絡先までご一報ください。

連絡先：宜野湾市教育委員会文化課市史編集係　☎ 098-893-4431

fax　098-893-4434

●シリーズ歴史の道②

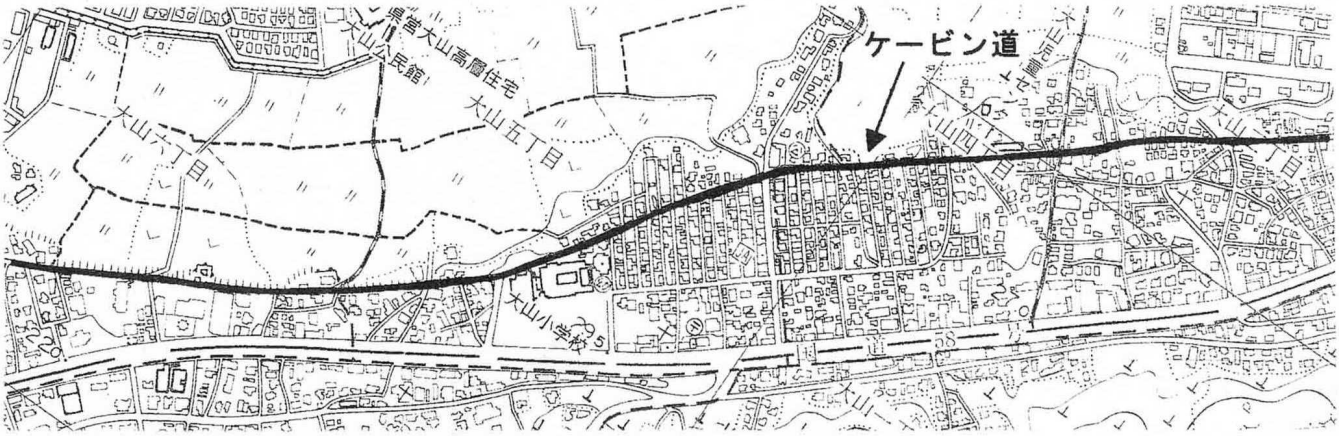
ケービン鉄道

戦前、宜野湾の西側、宇地泊・大謝名・真志喜・大山・伊佐には、沖縄県営鉄道（軽便鉄道）嘉手納線が敷かれていました。この嘉手納線は、1922（大正11）年3月に那覇駅を起点に嘉手納駅までの23.6キロが開通し、大謝名・真志喜・大山に駅がありました。

軽便鉄道の開通によって、これまでの徒歩か客馬車の利用に鉄道が加わり、人びとの移動手段にも幅が広がりました。三駅の中でも大山駅は、特に賑わいを見せていました。当駅には宇宜野湾・普天間方面からキビ運搬用にトロッコレールが敷かれ、製糖期にはサトウキビが貨車で嘉手納まで運ばれました。また、普天間宮に参拝へ向かう人びとや、大山の桃売りアングヮー（乙女）の中にも鉄道を利用して那覇へ向う者もいました。大謝名駅では、宇地泊の漁師が得た魚を売るイユウヤー（魚売り）にも利用者がいました。けれども大抵の物売りは、鉄道よりも徒歩で那覇へ行ったようです。

このような鉄道も沖縄戦で破壊されました。しかし、この鉄道跡は、現在も一部、道路として使用されています。写真は大山駅付近の場所で、大山児童センター前の道路です。大山小学校裏側や大山旧公民館前の道路は「ケービンミチ」と呼ばれ、当時の名残を残しています。本市の西海岸は現在、埋立てによって地形が変化していますが、以前はタイモ畑から西側は海岸でした。鉄道の走る様子を思い浮かべてみると、鉄道に揺られながら眺める西海岸の夕日は、さぞかし美しかったことでしょう。

写真：かつての大山駅付近（現在の大山四丁目）



地図：ケービンミチの跡